

# 子どものうつ病

国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科 宇佐美政英

## KEY WORDS

- 子ども
- うつ病
- 思春期

## はじめに

わが国において、うつ病といえば成人の精神疾患であると考えることが多いだろう。しかしながら、近年の「子どもでもうつ病になる」という考えは、操作的診断基準の浸透とともにわが国にも浸透してきた<sup>1)</sup>。2017年には、うつ病治療ガイドライン第2版が出版され、児童思春期のうつ病についても触れられるようになった<sup>2)</sup>。しかしながら、筆者が児童精神科医として20年弱働いてきた感想としては、成人期の内因性うつ病と同じような病態をとる子どもはきわめてまれであるというのが、臨床的な本音である。

本稿では子どものうつ病を概観しながら、安易に「子どものうつ病」と診断せず、まずは診察室に現れた子どもが抑うつ的にならざるを得なかった生育歴や環境因を考えるべきであるという筆者の考えを述べたい。

## I. 子どもを診察すること

はじめに、子どもを診るということについて触れておきたい。子どもを診るということは、いつか成人になる症例を診ているということのを忘れてはならない。臨床医は「子ども」というものをどのように考え、人生周期のなかで、あるいは社会のなかで、子どもをどのように位置付けるかという「児童観」ともいべき観点が求められる。成人期の病態を児童期にそのまま当てはめるわけではなく、臨床医は児童期、思春期という心身的にも大きく変化する時期を診ている自覚をもつべきである。すなわち、成人期からの遡行的に子どもを取り上げるのではなく、子どもを直接診て、子どもを理解し、子どもを診る目を養っておくことが必要である<sup>3)</sup>。

そして、思春期年代を理解しておくことこそが、うつ病の子どもを理解し